

感情的な出来事における 自伝的記憶と他者 エピソードの特徴の違い

野 内 類*

The Phenomenal Characteristics of Autobiographical Memory and Other Episode for Emotional Events

Rui NOUCHI

This study investigated differences between autobiographical memory and mother episode using MCQ (Johnson et al., 1988). Seventy-seven participants recalled positive, negative and neutral autobiographical memories and mother episodes, rated sensory, location detail and positive emotion about recalled events. Participants rated autobiographical memory had more sensory and location detail than mother episode. Autobiographical memory contained more positive emotion than mother episode. These results showed the phenomenal characteristics of their memories distinguished between autobiographical memory and mother episodes.

Key words: autobiographical memory, mother's episode, mood characteristic questionnaire.

問題・目的

自伝的記憶は、人がこれまでの人生を通じて経験した出来事の記憶である(佐藤, 2002)。近年、自伝的記憶の質的な側面に注目した研究が報告されている。これらの研究は、主に Johnson, Foley, Suengas, & Raye (1988) が考案した Memory Characteristic Questionnaire (以下 MCQ) を用いて研究が行われている。MCQ とは、参加者が想起した出来事に対して、その出来事の特徴(味覚、視覚など)について答える質問紙である。MCQ を用いた研究の結果、快の出来事は、不快と中立の出来事よりも多くの感覚的情報を持っていることが報告されている (e.g. D'Argembeau, Comblain, & Van der Linden, 2003)。

自伝的記憶は、エピソード記憶の下位分類であると考えられている(堀内, 2004)。同じエピソード記憶に分類される他者エピソード(例えば、母親の行動など)と自伝的記憶との違いは何であろうか。堀内(2004)は、自伝的記憶と他者エピソードのエピソード数を比べると自伝的記憶の

ほうが多いことを報告している。一方、f-MRI を用いた西村・長瀬・寺田・王(2005)の研究では、自伝的記憶を検索した場合のほうが、血流増加の規模が多いことや、前頭前野の活動の有無による気質的な違いがあることを報告している。

堀内(2004)や西村他(2005)の研究は、実際に想起された自伝的記憶と他者エピソードの内容について検討していない。そこで、本研究では、Johnson et al. (1988) の MCQ を用いて、自伝的記憶と他者エピソードの違いを出来事の質的な側面から検討することが目的である。本研究では、母親のエピソードを他者エピソードとした(堀内, 2004)。D'Argembeau et al. (2003) を参考に自伝的記憶と他者エピソードともに、快と不快と中立のエピソードを想起させ、そのエピソードの情報量を MCQ で検討した。

方 法

参加者 専門学校生 77 名(男性 33 名, 女性 44 名)が実験に参加した。平均年齢は 19.51 歳(1.38)であった。

MCQ Johnson et al. (1988) の MCQ より、出来事の感覚的な特徴に関するもの(感覚、嗅覚、味覚)と出来事のロケーションに関するもの(場所、状況)と出来事の感情価を評定する項目を選択した(e.g. D'Argembeau et al., 2003)。出来事の特徴に関するもの(感覚、嗅覚、味覚)は、1. 全くないから 7. とても多いの 7 件法で評定した。出来事のロケーションに関するもの(場所、状況)は、1. 鮮明でないから 7. 鮮明であるの 7 件法で評定した。出来事のポジティブ感情を 1. 全く感じないから 7. とても感じるの 7 件法で評定した(D'Argembeau et al., 2003)。

実験冊子 フェースシート 1 枚と用紙の上部にエピソードを記述する欄と用紙の下部に MCQ の項目を印刷した用紙 6 枚(快、不快、中立の自伝的記憶と母親のエピソードそれぞれ 1 つ)をまとめて実験冊子とした。想起するエピソードの順番を変えた実験冊子を 6 パターン用意した。

手続き 集団で実施した。実験冊子を配布後、実験の説明をした。自分(母親)が過去に経験した快、不快、中立のエピソードを 1 つずつ想起し、用紙に記入させた。その後、そのエピソードの内容について MCQ で答えた。1 つのエピソードの想起し、MCQ の評定する時間は 2 分であった。

結 果

視覚と嗅覚と味覚の評定得点の平均値を感覚得点(sensory score: 以下 S 得点)とした。場所と状況の評定得点の平均値をロケーション得点(location score: 以下 L 得点)とした。ポジティブ感情はそのまの値をポジティブ感情得点(positive emotion score: 以下 P 得点)とした。

* 中央大学文学研究科
Department of Psychology, Chuo University

表1 自伝的記憶と母親のエピソードの感情価ごとの MCQ 得点の平均値

	感 覚			ロケーション			ポジティブ感情		
	快	不快	中立	快	不快	中立	快	不快	中立
自伝的記憶									
4.71	3.68	3.85	6.16	5.79	5.70	5.57	2.60	4.10	
(1.36)	(1.36)	(1.35)	(0.94)	(1.38)	(0.96)	(1.71)	(1.70)	(1.43)	
母親のエピソード									
3.39	2.89	3.67	4.94	5.01	5.12	4.70	2.77	4.01	
(1.57)	(1.19)	(1.73)	(1.66)	(1.38)	(1.66)	(1.72)	(1.72)	(1.59)	

(表1)。

各得点に対して2(対象：自己，母親)×3(エピソードの感情価：快，不快，中立)の2要因被験者内の分散分析を行った。分析では，有意水準を5%に設定した。その結果，対象の主効果(S得点： $F(1, 76)=31.97$; L得点： $F(1, 76)=42.16$; P得点： $F(1, 76)=4.41$)と感情価の主効果(S得点： $F(2, 152)=15.27$; P得点： $F(2, 152)=73.24$)と対象と感情価の交互作用(S得点： $F(2, 152)=8.14$; L得点： $F(2, 152)=3.23$; P得点： $F(2, 152)=7.07$)が有意であった。交互作用が有意だったため，各得点について単純主効果検定を行った。その結果，快エピソードにおいて自伝的記憶の方が母親のエピソードよりも得点が高かった(S得点： $F(1, 228)=39.95$; L得点： $F(1, 228)=37.69$; P得点： $F(1, 228)=17.45$)。不快エピソードにおいて自伝的記憶の方が母親のエピソードよりも得点が高かった(S得点： $F(1, 228)=13.90$; L得点： $F(1, 228)=15.61$)。中立エピソードにおいて自伝的記憶の方が母親のエピソードよりも得点が高かった(L得点： $F(1, 228)=8.64$)。自伝的記憶における感情価の効果が有意であった(S得点： $F(2, 304)=15.53$; L得点： $F(2, 304)=3.39$; P得点： $F(2, 304)=71.30$)。Ryan法による多重比較を行ったところ，S得点では快・不快>中立であり，L得点では快>中立であり，ポジティブ得点では，快>中立>不快であった。母親のエピソードにおける感情価の効果が有意であった(S得点： $F(2, 304)=7.88$; P得点： $F(2, 304)=31.02$)。Ryan法による多重比較を行ったところ，S得点では，快・中立>不快であり，ポジティブ得点では，快>中立>不快であった。

考 察

実験の結果から，自伝的記憶と他者エピソードの違いは，検索時の脳の活動部位の違い(西村他，2005)だけでなく，エピソードの情報量の違いがあることが示された。自伝的記憶は，他者エピソードと比べて豊富な情報量があるため，自己の連続性や一貫性を支える自己機能や自伝的記憶が様々な判断や行動を方向づけるのに役立つという指示機能があると考えられる(Bluck, 2003)。

本研究では，先行研究(D'Argembeau et al., 2003)で指摘された快エピソードが不快エピソードよりも情報量が多いという快エピソード優位が見られなかった。D'Argembeau et al. (2003)は最近1年間で行った出来事を記述するように指示しているが，本研究では特に出来事の時期を指定しなかった。遠い過去のエピソードは近い過去のエピソードよりも情報量が多いことが指摘されている(Johnson et al., 1988)。本研究の参加者が，遠い過去のエピソードを想起したために，快エピソード優位の効果が見られなかった可能性がある。今後は，想起エピソードの時期を指定して，自伝的記憶と他者エピソードの質的な違いを検討する必要があるであろう。

引用文献

- Bluck, S. (2003) Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, 11, 113-123.
- D'Argembeau, A., Comblain, C., & Van der Linden, M. (2003) Phenomenal characteristics of autobiographical memories for positive, negative, and neutral events. *Applied Cognitive Psychology*, 17, 281-294.
- 堀内 孝 (2004) エピソード検索における回想経験と自他の違いが後続の再生テストに及ぼす影響 心理学研究, 75, 148-153.
- Johnson, M. K., Foley, M. A., Suengas, A. G., & Raye, C. L. (1988) Phenomenal characteristics of memories for perceived and imagined autobiographical events. *Journal of Experimental Psychology: General*, 117, 371-376.
- 西村千秋・長瀬有紀・寺田和子・王 力群 (2005) イメージ想起に付随する脳神経活動のfMRIによる検討 パイオフィードバック研究, 31, 19-26.
- 佐藤浩一 (2002) 自伝的記憶 井上毅・佐藤浩一(編著) 日常認知の心理学 北大路書房, pp. 70-87.
- (受稿：2007. 7. 9, 受理：2007. 10. 24)